

令和 2年 12月 4日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980221

氏名 木村 彩音

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先：都市名 ケアーズ (国名 オーストラリア )
2. 研究課題名（和文）：オーストラリア・アボリジニの「盗まれた世代」の家族関係をめぐる人類学的研究
3. 派遣期間：令和 元年 6月 16日 ~ 令和 2年 6月 15日 (365日間)
4. 受入機関名・部局名：James Cook University, Division of Tropical Environment and Societies
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

派遣先では、オーストラリア、クイーンズランド州北部の先住民研究を専門とするロジータ・ヘンリー教授の指導を受け、同地域の複数の場所でフィールドワークを実施した。当初は先住民の子どもの強制的引き離し（その当事者を「盗まれた世代」と呼ぶ）に絞り、その植民地主義的介入の影響が当事者から下の世代にいかにか現地調査から検討することが研究の主題であった。しかしヘンリー教授から幅広く他の事象も視野に入れた枠組みで調査するよう助言を受けた。

それを踏まえて調査はケアーズ、キュランダ、トレス海峡の木曜島を中心に実施した。これらの地では、①主流社会による特定産業の導入（サトウキビ栽培、観光開発、真珠貝漁と真珠養殖業）、②伝統的土地の都市化、③強制的引き離し、インターマリッジなどによる親族構造の根本的变化という、大きく分けて三つの植民地主義的介入の影響を受けている。調査はこの三つの観点から、現地の人々への聞き取り調査、参与観察を中心に実施した。ヘンリー教授には適宜対面およびオンラインで、調査の方向性などについて指導、助言を受けた。結果として、当初の主題を含み込みつつも、狭い観点にとらわれない多様な調査データを収集するとともに、植民地主義による先住民の物理的な移動および親族構造上の再配置が及ぼす影響という、より広い研究上の枠組みを着想するに至った。またヘンリー教授に現地での協力者の紹介を受け、現地において広い人脈を築くことができた。ジェームズ・クック大学の木曜島キャンパスも訪問し、調査上の手続きに関して現地研究者から助言を受けるとともに、学術上の意見交換をおこなった。また調査と並行して、ジェームズ・クック大学図書館およびケアーズ、木曜島の市立図書館に通い文献調査を随時実施し、現地の植民地化の歴史的展開と先住民の関係性に関する知見を深めた。

## 6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今後は今回の現地調査で得られた成果を順次発表する予定である。具体的には、日本文化人類学会、日本オセアニア学会、オーストラリア学会などでの口頭発表、また各学会の学術雑誌『文化人類学』、*People and Culture in Oceania*、『オーストラリア研究』への論文投稿などを検討している。

また新型コロナウイルスの影響により、今回の派遣期間中に派遣先のジェームズ・クック大学における研究成果発表を実施することができなかった。その代替案として、オンラインでの口頭研究発表などが実施できるか、ヘンリー教授と検討、相談をしている。口頭発表の実施可否にかかわらず、同教授の助言を受けつつ、オーストラリアをはじめとする海外の学術雑誌への論文投稿もおこなう計画である。

以上の研究発表などから不足データを洗い出したうえで、短期の捕捉調査も実施したいと考えている。新型コロナウイルスの影響などにより、即時の渡航が困難な場合は、調査対象者へのオンラインでのインタビュー、質問票の送付などで不足している情報を補う予定である。

今後の研究計画の方向性としては、木曜島とその周辺の島々を中心とした、トレス海峡諸島により焦点を当てる予定である。トレス海峡諸島には、真珠産業のためにアジアや太平洋諸島から多くの人々が移住、あるいは労働力として強制的に連れてこられた歴史がある。彼らは先住民とのインターマリッジを通してトレス海峡諸島に定着していった。結果として、現在のトレス海峡諸島民の親族構造には外部からやってきた人々とその子孫が複雑に組み込まれている。更に彼らの親族構造を特徴づけるものとして、伝統的養子縁組があげられる。これは、親族の枠組み内で互いに子どもを養子に出す/迎えるものである。今後は、この二つの要素から成るトレス海峡諸島の親族構造の特徴を分析し、彼らの関係性において植民地主義的介入の影響がいかに関わっているのか検討していきたいと考えている。

## 7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今回の派遣を通じて、ヘンリー教授をはじめとする、オーストラリアの研究者と学術的交流をもつことができたのは、大きな収穫であった。今後もこのコネクションを生かし、研究上の意見交換、共同研究会の開催などの交流を図っていきたいと考えている。また研究員として現地の大学で研究に従事し、そこに所属する研究者から指導を受けられたことは、オーストラリアを含む海外学術誌への論文投稿、国際学会における研究発表を今後実施していくうえで、自身の研究にとって直接的に有意義であっただけでなく、オーストラリアにおける研究活動のあり方、基本的なスタンス、研究理念などを知る貴重な機会となった。

派遣期間中はその時間の多くを調査に費やした。そのため調査は派遣先大学の手続きおよび調査倫理を含む規則に則っておこない、調査地ではオーストラリアの大学の研究員として扱われることとなった。これによって、現地では日本の大学院生を名乗るよりも、各関係組織、団体への訪問が許可されやすく、また円滑に調査対象者や協力者と信頼関係を築くことができた。その一方で、オーストラリアにおける調査手続き、調査倫理は日本と異なる点が多く、対応に苦慮した面もあった。しかしこれによって、論文執筆、他の研究者との学術的交流だけでなく、調査前の準備から調査手法、プロセスなども含めたオーストラリアにおける一連の研究の流れを、簡易ながら経験することができた。これは本プログラムで派遣され、調査をおこなわなければ経験できないことであった。研究者を取り巻く調査環境の差異が、調査そのものはもちろんのこと、研究上の主題や思考プロセス、研究課題の結論にまで影響を及ぼすことを身をもって感じた派遣であった。